

こひしくはけながきものを

—改訓の問題—

橋 本 研 一

(一) 疑義

恋敷者 気長物乎 今谷 乏之牟可哉 可相夜谷

恋しくは日長きものを今だにも乏しむべしや逢ふべき夜だに

(巻十 2017)

日本古典文学大系本万葉集による。以下同じ。

万葉集の歌は古今集以下の諸歌集のうたとは異なり、直情雄勁、人間感情の素朴な吐露が多く、作者の表現意図や感情が明瞭で、その高い抒情精神は人々の心に深い感銘と親しみを懐かせるものが少なくない。しかるに、万葉集巻十 2017 の右のうたは、伝説に基づく歌とはいえ、繰返し熟読しても要旨の把握がしくく、木に竹をついだような、あるぎこちなさを感じさせられるのである。この歌には類歌がある。

恋日者 食長物乎 今夜谷 令乏応哉 可相物乎

恋ふる日は日長きものを今夜だに乏しむべしや逢ふべきものを

(巻十 2079)

こひしくはけながきものを

いずれも七夕の歌であるが、後者の方がなだらかで納得しやすい。この原因はどこにあるのであろうか。これに関しては、鹿持雅澄の「万葉集古義」につきのような言辞がある。

……。谷の言二つありていかが、此下に、恋日者気長者乎今夜谷令乏応哉可相物乎とあるは今の歌の重出たるものときこゆ。彼方理かなへるか。

すなわちその理由として、助詞「だに」の重複用法を挙げている。2017の歌に見るとき「だに」の重複用法が他にもあるのかどうか未調査であるが、後世の感覚からすれば、確かにあるぎこちなさを感じる歌ではある。けれどもこの歌において、「今だにも乏しむべしや」と表現し、更にまた重ねて必ずしも明確とはいえない「今」なるときを「逢ふべき夜」と規定し、年一回の限られた逢う瀬のその夜であることを明示しようとしているのであって、このような表現形式はむしろ論理的であり、とがめらるべきではないものと思われるのである。そこでもしこの歌の表現意図が読者に不明確であるとするならば、「だに」の重複用法以外のと

ころにあるのではあるまいか、そう思っただけであらためて 2017 の歌と 2079 の歌とを比較してみると、初句「恋しくは」「恋ふる日は」が相違しており、この部分に問題があるのであるまいかと気がつくのである。

㊦ 「恋しく」の扱い方

「恋しくは」の「は」が接続助詞ではなく係助詞のそれであることは論をまたないであろうが、「恋しく」の扱い方には考慮すべき余地があるかもしれない。「万葉集全註釈」の 2017 の歌の「恋敷者」の【釈】の部分には、つぎのように記してある。

コヒシクハ。コヒシクは、名詞。これを提示して、ケ長キモノヲで説明している。集中コヒシクに二種がある。甲は、形容詞恋シの副詞形で「伊麻能其等 古非之久伎美我 於毛保要婆」(巻十七、三九二八)「可久婆可里 古非之久安良婆」(巻十九、四二二二)、「安比美受波 古非之久安流倍之」(巻二十、四四〇八)などの例はこれである。これは副詞としての用法に終始するもので、「伊加婆加利 故保斯古阿利家武」(巻五、八七五)の如きコホシクとあるものの転であると考えられる。「日本恋久 鶴左波爾鳴」(巻三、三八九)、「杏人 浜過者 恋布在奈利」(巻九、一六八九)の恋久、恋布の如きは、同じ語法でコホシクと読むべしと考えられる。これらは、名詞としての用法の無いものである。乙は、名詞として使用されるもので、動詞恋フに時の助動詞キの連体形、および助詞クの接続したものである。これは見シク、宿シク、思ヘリシクなどと同様の語法によるもので、恋していることの意味である。その例としては、「阿和雪 千重零敷 恋為来 食

永 我 見 惚」(巻十、二二三四)、「故非之久能 於保加流和礼波」(巻二十、四四七五)の如き、これである。今の歌も、この乙の用法である。この二種は、もとコホシク、コヒシクで区別されていたと思われる、後に形容詞コホシクがコヒシクに転じたので、今日混同を感じるに至ったものであろう。コヒシクの副詞の用例は新しい。

要するに、筆者の用語に従えば、甲は本来「こほし」なる形容詞の連用形連用法であり、乙は動詞「恋ふ」の連用形「恋ひ」に過去の助動詞「き」の連体形「し」がつき、更に準体助詞「く」がついた連語ということになる。「く」を接尾語とする山田孝雄博士以来の通説に従えば「恋ひしく」全体で名詞ということになるが、橋本進吉の「国文法体系論」の分類に従う。「全註釈」の説は全体を名詞としながら「く」を助詞としている。沢瀉久孝博士の「万葉集注釈」では、「恋ひ慕った事は長の年月であったものを」と口訳し、【訓釈】でも「動詞『恋ふ』の連用形に過去の助動詞『し』がついて、事の意の『く』がつづいたもの、恋ひした事は、の意」と注している。また「古典文学大系」でもほぼ同様の結論で、「恋しく思ったのは長い間であったのに」と訳している。

ここで一つ注目しなければならないことがある。「恋しくは」をもしこのように解釈し、「し」を過去の助動詞の連体形と説くことが正しいとするならば、「恋ふ」動作、状態は過去において存在した事実ということになり、現在はおかかわりがないということになりはしまいか。

翻って「恋しくは」の歌の意を憶測するに、ずっと長いこと恋しつつきてきた牽牛と織女とが、年に一度の逢う瀬を待ちこがれ、七夕の宵の

わずかなひとときに期待する。そのわずかなひとときこそ、長期にわたる抑圧された恋愛感情から開放される、かけがえのない貴重なひとときであり、乏しむべきではないと言っているのである。私は昭和四十年秋の国学院大学国語研究会の発表会で「『つ』の意味について」と題する小考を述べたが、その中で、万葉集における「べし」の意味は、ほぼ「当然の予想または推定」と考えられるということを書いた。もしそうであるなら、「逢ふ」事實は、虚構の世界においてこの歌を詠じた時からは未来の時となり、「今だにも」の「今」は未来における「今」となり、時間的な距りのある「今」となるのである。しかるに、「恋ふ」という精神状態はこの歌を詠じた「今」においては過去からひきつづいていらずであり、このような場合に助動詞「き」を用いて表現することが普通であったのかどうか、もし少なくとも古代において普通でなかったものとするれば、「恋しくは」の訓や文法的解釈に疑義を挿まなければならぬ。

㊦ 「こひしくは」の文構成における立場

「こひしくは」に問題があるとして、その一つに考えられることは、「動詞の連用形+過去の助動詞の連体形+準体助詞」の形式の連語が、文中において主語の立場に立つ用例が他にどうか、あるとしてどの位の割合であるか、という疑問である。そこで集中の同形式とみられる連語「しく」のついた文節が、文中においてどのような構成的立場をとっているかを調査してみた。(「万葉集総索引」による)

○住吉の名児の浜辺に馬たてて玉拾ひしく常忘らえず(巻七) 1153)

こひしくはけながきものを

○わが背子を何処行かめときき竹の背向に寝しく今し悔しも(巻七) 1412

○秋の野の草花が末を押しなへて来しくもしるく逢へる君かも(巻八) 1577

○見まく欲り来しくもしるく吉野川音の清けさ見るにともしく(巻九) 1724

○天の河渡瀬ごとに思ひつつ来しくもしるく逢へらく思へば(巻十) 2074

○夜のほどろわがでて来れば吾妹子が面へりしく面影に見ゆ(巻十四) 3577

○愛し妹を何処行かめと山菅の背君に寝しく今し悔しも(巻十四) 3577

○沫雪は千重にふり敷け恋ひしくの日長き我は見つつ偲はむ(巻十) 2334

○初雪は千重に降りしけ恋しくの多かるわれは見つつ偲はむ(巻二十) 4475

○恋ひしくに 痛きわが身そ いちしろく 身に染み透り 村肝の 心 砕けて 死なむ命 急になりぬ(巻十六) 3811

これらの歌の「——しく」の用法をみるに、その下に種々の助詞の付属しているものもあるが、最後の「恋しくに」の用例を除くと、いずれも主格の位置に立つものばかりである。筆者がもし「こひしくは」の形に異常の感をいだいたとしても、主語に係助詞「は」のついた形が他に用例をみないだけであって、係助詞「も」がついている用例があることからすれば、主語に係助詞「は」がついても不自然ではなさそうである。そうならこの面から「こひしくは」の表現に異常をみとめるわけにはゆかない。最後の「恋しくに」の形は連用修飾の形で下にかかるが、卑見によればこの場合の「恋しく」は形容詞連用形と見做すべきもので

あって、諸家の従来の解釈の妥当でないことを思わせられるのであるが、このことに關しては別稿に譲ることにする。

(四) 「恋敷者」の訓

それではこの本文に問題はないのか、また諸本ではどのような訓が付されてきたのか、「校本万葉集」をたよりに調べてみる。「恋敷者」の文字には異同はない。底本となっている寛永の版本の訓では「コヒシケハ」となっているが、元暦校本、類聚古集は「こひしきは」、神宮文庫本、西本願寺本、細井本、温故堂本では「コヒシキハ」で、いずれも「こひしきは」となっており細井本のみ「敷」の左訓として「シケ」を付加している。諸説では、代匠記精撰本「コヒシクハ」童蒙抄「コヒシキハ」となっていて、「こひしくは」の訓は、契沖の「代匠記精撰本」においてはじめて付したものであろうか。また、上欄の記事により赤人集に「こひしきはけながきものをいまたにもみしかくもかなあひみるよたに」という類歌のあることが知られるのである。

さて、「代匠記精撰本」で契沖は、どのような理由で、「こひしくは」と改訓したのであろうか。「代匠記精撰本」の該当箇所を引用する。

発句ヲコヒシケハト点セルハ恋シケレハナリ。今按コヒシクハトモ読ベシ。コヒシキハノ意ナリ。第十六ノ長歌云。恋之久爾痛吾身曾云々。此恋之久ナリ。恋シクハトフラヒキマセナト云時ハ恋シカラハノ意ニテ替レリ。

これだけではその理由を明らかにすることはできないが、憶測するところによれば、つぎのようなことであらうか。

発句「コヒシケハ」は「コヒシケレハ」であるといっている。上代語では、形容詞の未然形・已然形に「――け」の形があり、(東国語では連体形にも)ここは已然形「恋しけ」で、確定条件をあらわす場合と判断したためであらうか。契沖が未然形と判断しなかったことは、文末の「恋シクハトフラヒキマセナト云時ハ恋シカラハノ意ニテ替レリ」という言葉で推察がつく。さらにまた、卷十六の長歌の「恋ひしくに痛きわが身そ」³⁸¹¹の「恋ひしく」と同様の用法であるといっている。³⁸¹¹の「恋ひしく」は、武田博士の「全注釈」や沢瀉博士の「注釈」にいずれも動詞「恋ふ」に過去の助動詞「し」がつき、更に「事」の意をあらわす「く」がついたものとしてるので、「恋ひしくはけながきものを」の「恋ひしく」に示された両博士の判断と同様のものと考えられるのである。けれども「代匠記精撰本」の「今按コヒシクハトモ読ベシ。コヒシキハノ意ナリ」という解説と考えあわせると、「コヒシキ」は形容詞「コヒシ」の連体形で、たとえ連体形準体法の「コヒシイコト」の意であるとしても、動詞「恋ふ」の連用形に過去の助動詞「き」の連体形「し」がつき、更に「コト」の意をあらわす「く」がついてできた体言または体言相当格の連語「恋ひしく」とは文法上において相異があるばかりでなく、過去の意味を含まぬかどうかという点で意味上の相違も生じることに、代匠記本文はつじつまのあわないことになるのである。更に契沖が「こひしけば」の訓を排除しようとした事は正しかった。何故なら、「こひしけば」の形は確かに「こひし」の上代における未然形又は已然形に「ば」のついた形として存在し、仮定条件又は確定条件を表現

する形ではあるが、「けながきものを」につづいて意味をなすことなくそのようなものとしては文法上支離滅裂で、文章論理にあわず、又、動詞「恋ふ」に動詞「敷く」の已然形がついた連語または複合動詞とも全く考えられないからである。

それにしても巻十を有する古写本の傍訓にいずれも「こひしきは」となっている「恋敷者」の訓を改めなければならぬ根拠や必然性は一体どこにあるのであろうか。契沖の代匠記初稿本においては底本に流布本を使用した。その為に誤りも多かった。そこで徳川光圀公が手持の写本校合本などを貸与し、それに基づいて精撰本を執筆したことになっている。徳川光圀が貸与した異本がどのようなものであったか、浅学にして十分知るべくもないが、「日本文学大辞典」の久松潜一博士の「萬葉集代匠記」の解説によれば、校本（飛鳥井本）、別校本（校合本）、官本（中院本）、幽齋本（阿野本）、紀州本等と対校しているものようである。このうち、例えば阿野本は西本願寺本系の孫本であり、これらのことを考えて「こひしきは」の訓の存在を不承知であったとは思えないのであるが、これに従わなかったのはどのような理由に基づくものであるうか、疑問に思われる。

さらに、赤人集には類歌「こひしきはけななきものをいまたにもみしかくもかなあひみるよたに」が存在している。2017の歌は柿本人麿歌集所収のものであり、ほぼ人麿の作と断じてよいものと思われるが、この類歌は赤人集に収められている。三十六人集に含まれる万葉歌人の家集は「柿本集」「家持集」「赤人集」であるが、それらには明らかに人麿・家

こひしくはけながきものを

持・赤人の作でないもの、また万葉集の読人しらすの歌などが多く混入しており、いかなる立場から編纂されたものか明らかでないこと、久松潜一博士や久曾神昇博士の説かれるところである。さらに森本治吉博士は、赤人の歌について、「後世の歌集等に採られてゐるものは、殆ど誤り伝へられたものか偽作だと考へてよい。彼の作だけを集めた和歌集『赤人集』も平安時代の初期まで（『万葉集』の補訂の行はれたと考へられる時代）は存在しなかったと思はれる」（『日本文学大辞典』の「赤人集」と述べられ、「赤人集」の信憑性の乏しさを間接的に述べられた。万葉集巻十 2017の歌は柿本人麿歌集所収のものではあっても、柿本人麿歌集の成立の事情を考慮すれば、この歌を人麿の歌に絶対間違いないと断ずることは出来ないかも知れないが、「赤人集」の「こひしきは」の歌は更に赤人の歌とは断じがたく、小異はあっても柿本人麿の歌に極めてゆかりがふかいと言えるであろう。

三十六人集の成立について久曾神昇博士は、『和歌文学大辞典』の「三十六人集」の解説で

「三十六人撰」の成ったと推定される寛弘七₁₀₁₀以後に成った筈であり、また千載集及び「実家卿集」により、藤原公能_{永曆 元 1100}没の書写した以前と知られる。他に徴すべき確証はないが、現存古写本により、天永三₁₁₁₂以前に存したと推定される。かくて一一世紀中頃に集められたものであろう」

と述べ、全体がまとめられた時期を十一世紀中頃と推定しておられるから、「赤人集」の成立は更にそれ以前であったことは当然である。万葉

集の古写本の書写年代は新らしくとも、伝来の経路さえよければかなり古い時代の訓を伝えていられると思われが、「赤人集」に見える「こひしきは」のうたも、平安時代初期の形を残しているとみられないこともあるまい。そうすれば、平安時代中期より以前の時代における「恋敷者」の訓において、「こひしくは」であった可能性はさらに縮少されるはずである。しかしここでもう一度文字面に立ちもどって「恋敷者」の「敷」の字が万葉集中でどのように訓まれているかをふりかえてみることにする。

(四) 「敷」の訓

「万葉集総索引漢字篇」の「敷」の項によって音仮名以外で用いられている「敷」の訓義を引用する。

- シカ 一〇―《助動》 〇高―為 〇太―為
- シキ 今― 〇片― 〇悔― 〇コゴ― 〇恋― 〇―敷・頻・領
- 一〇―タヘノ《枕》 〇―細《枕》 〇―細布《枕》 〇―津ノ浦 〇―浪 〇―ニ 〇―野 〇竹―浦 〇時― 〇名著― 〇早―
- ヤシ 〇平《地名》 〇太― 〇太高― 〇零― 〇目頬―
- 〔約〕―有
- シク イヤ―シクニ 〇イヤトコ―ニ 〇気留〔田〕― 〇恋― 〇―
- 〔頻〕〇布― 〇―布 〇―シクニ 〇―ニ 〇―及 〇―布
- 〇― 〇常― 〇床― 〇乏― 〇友― 〇零― 〇目列―
- 〔約〕ユユ―有
- シケ 恋― 〇並― 〇零―

さきほど、文法上、意味上の理由によって2017の歌の「恋敷」をコヒ

シケと訓ずることの不適当であることを述べた。「万葉集総索引」で「敷」の訓にシケを与えている用例は、

梓弓引き豊國の鏡山見ず久ならば恋しけむかも(卷三 311)

一例のみで、これは形容詞の活用語尾に関するものであるが、「並敷」「零敷」の「敷」はいずれも動詞「敷く」の活用形であって、

並敷 卷六1047(已然) (最近の訓ではいずれも「思へりしく」と改めて

零敷 卷六1040(命令) (最近の訓ではいずれも「零りしく」と終止形に

改めている)

卷八1639(已然) 卷八1639(命令) 卷十2334(命令)

のように現われるが、前二者は改訓されていて、それに従えば後の三者のみが問題として残ることになる。

「シク」と訓の付された「敷」の仮名のうち、活用語の語尾に係るものは、「恋敷」「乏敷」「友敷」「目列敷」の四語で、このうち、「乏敷」「友敷」を除いた「恋敷」「目列敷」「目頬敷」は、「シキ」と訓じられた「敷」の中にも存在する。「敷」を含む「めづらしく」「めづらしき」の用例は、

〇三諸つく鹿背山の際に咲く花の色めづらしく百鳥の声なつかしく在り(巻六 1059)

が欲し(巻六 1059)

〇めづらしき人を吾家に住吉の岸の黄土を見むよしもがも(巻七 1146)

の二例であって、この二つの歌においては、それぞれ文構造から「めづ

らしく「めづらしき」と連用形乃至連体形に訓まるべき必然性をもっているものと考えられる。

さて「恋敷」の「コヒシキ」「コヒシク」はそれぞれ所を得ているであろうか。「こひしき」と訓まれた「恋敷」の用例を検索すれば、

① 稲日野も行き過ぎかてに思へれば心恋しき可古の鳥見ゆ (巻三) (253)

② 旅にして物恋しきに山下の赤のそほ船沖へ漕ぐ見ゆ (巻三) (270)

③ 霰降り鹿島の崎を波高み過ぎてや行かむ恋しきものを (巻七) (1174)

④ 淡海のや矢橋の小竹を矢着かずてまことありえめや恋しきものを (巻七) (1350)

⑤ 白真弓いま春山に行く雲の行きや別れむ恋しきものを (巻十) (1923)

⑥ 黄葉の過ぎかてぬ児を人妻と見つつやあらむ恋しきものを (巻十) (2297)

⑦ 秋の夜の月かも君は雲隠りしましく見ねば幾許恋しき (巻十) (2299)

⑦ 行きて見て来れば恋しき朝香瀉山越しに置きて寝ねかてぬかも (巻十一) (2698)

のごとくである。右を見るに、③④⑤⑥⑧は連体形連体法、②は連体形準体法、⑦は連体形終止法であることは異論のないことであろうし、①は「心恋しき」ではなく「心恋しく」と連用形連用法に訓み、「見ゆ」

にかかると見ることも形式的には可能でありそうであるが、意味面からはほぼ成立しまいと思われる。①⑧の訓はいずれも妥当であろう。それでは「こひしく」と訓まれた「恋敷」の用例ではどうか、本稿で問題にしてきている巻十 2017 の歌のほかでは、総索引によると、

○ 愛しきやし然ある恋にありしかも君におくれて恋しく思へば (巻十二)

こひしくはけながきものを

3140

の一例を挙げている。

この歌は、武田博士の「万葉集全註釈」では「好もしい、そうあるべき恋でありたいのです。君におくれて恋していたことを思えば」と通釈し、更に「コヒシクは、恋したことで、コヒは動詞。形容詞ではない」と注しておられる。即ち、「動詞の連用形十過去の助動詞の連体形十準体助詞」とみておられるわけである。しかしこの歌の場合、「旅立ち」に残された女が、男に対する烈しい恋心を「旅立ち」の後の空虚な気持によって確認したことを詠んだものであって、「然ある恋にありしかも」の「し」は過去であろうが、「恋ひしく」の「し」は過去の意とはとれず、現在において断ちがたい恋の執念を表現すべきところである。従って、筆者は「全註釈」には従えない。

「古典文学大系」本の上欄の注では、「恋ひしく」についての説明はついでない。けれども、「大意」のところでは、「あゝ、こうしたはっきりした恋の気持であったのだなあ。あなたの旅立ちの後に残されてこんなにも恋しいことを思うと」とあるところからすると、形容詞の連用形連用法とみておられるのかとも思われる。しかしもしそうだとすると、「あなたをこんなにも恋しく思うのだから」のような訳であってよさそうなのに、「恋しいことを思うと」とあって、これなら「恋しき思へば」と連体形に訓んだ場合の訳としての方が適切であろうと思われる。「恋敷」を「コヒシキ」と訓んでいる場合は、万葉集中八例にも及び、それらは「コヒシキ」以外には訓めそうもない場合ばかりであったことは前記の

ごとくである。巻十二 3140の「恋敷」を「コヒシキ」と訓ずることは不
 適当であろうか。諸本の訓を調べてみる。

「校本万葉集」の底本である寛永の版本では、「コヒシキ」の訓が付さ
 れている。諸本の訓では、西本願寺本に「コヒシクヲモヘハ」となっ
 て、「ク」を直して「キ」としている。更に諸説では、「万葉集略解」
 に「コヒシクモヘハ」とあって、西本願寺本において「ク」から「キ」
 に直した時期に疑問が残りはするが、古写本の訓はほとんど「コヒシキ」
 である。「略解」では「恋重るなれば、しくと訓むべし」と説いている
 が、真意のほどは理解しがたく、理由とするには足りない。沢瀉久孝博
 士の「万葉集注釈」で「コホシキオモヘバ」と連体形に訓じたのは、
 「コホシキ」か「コヒシキ」かで問題があるとしても、誠に当を得てい
 る感があるのである。

かく考えれば「コヒシク」と訓じられる「恋敷」二例のうち、巻十二
 3140の例は「コヒシキ」または「コホシキ」と訓むのが妥当だということ
 になり、残る一例は本稿の主眼点である巻十 2017の「こひしくはけな
 きものを」の「こひしく」のみとなる。しかるに「こひしくはけな
 きものを」の「こひしく」は、諸本の訓を照合の結果では、「こひしき」
 と訓むのが妥当であると思われる数々の条件を示している。

丙 「こひしくは」と「こひしきは」との意味上の相違

以上の理由だけで「こひしく」の訓を「こひしき」と改める理由とし
 て十分であろうか。

「動詞の連用形十過去の助動詞の連体形十準体助詞」の「恋ひしく」の

訓から、形容詞の連体形の「恋しき」に改めるとき、そこにおのずから
 意味上の相違を意識しないわけにはゆかない。過去の意を表わすはずの
 「き」の連体形「し」を含む形は、あきらかに時間の経過の中に「恋ふ」
 動作・状態を見ていることばである。それに対し、「恋し」は形容詞で、
 時間の経過に関係のない状態をあらわすことばである。この原作者の発
 想はそのどれであったのであろうか、疑問にもなる。

さらにまた、この作品の場合、過去の助動詞「き」をあのような場合
 に用いて「き」の意味範疇と矛盾しないか、「き」の意味を調査して、こ
 の歌の場合を省みる必要はないのか。都合のいいことと言えるかどうか
 わからないが、右のうち前者の疑問解決へのヒントとして
 2017の類歌
 が存在することである。

恋ふる日は日長きものを今夜だに乏しむべしや逢ふべきものを

(巻十 2079)

この歌の初句「恋ふる日は」が「恋しくは」にかわる部分であるが、
 「恋ふる日は」には、諸本の本文および傍訓の異同がない。2017・2079の両
 歌はともども七夕の歌であるばかりでなく、表現内容は全く同じであ
 る。この両者を比較すると後者の方がなだらかで、後者は先行する前者
 から出たごとく思われる。そのことは、橋本達雄氏が「人麻呂歌集と七
 夕歌」と題する御論考(「国語の研究」第一集)で既に述べて居られる
 ところである。その場合、「恋ひしくは」から「恋ふる日は」が生じた
 と見るよりも、過去の助動詞を含まない「恋しきは」から「恋ふる日は」
 が生じたと見る方が意味面からの類似性があり、妥当な考え方とは言え

まいか。勿論、万葉集巻十は作者不明の歌の極めて多い巻であり。(古
典文学大系「解説によれば、巻十、五三八首のうち作者不明の歌は四七
〇首にも及び、集中最多の数を示している) 作歌事情も編集方針もわか
りにくく、多くは特定の作者があるのか、それとも民謡風にうたわれて
いたのを採録したものかすらも不明であって、類歌の関係も単純ではあ
るまいと思われるが、仮りにある原形から類歌が生じたとすれば、「恋し
きは」から「恋ふる日」はが生じたと見る方が納得がいきやすいのでは
ないか。そのことは、同じく「日長きものを」という述語の主語である
初句を有する、巻十の七夕の歌に、

○恋しけく日長きものを逢ふべかる夕だに君が来まさざるらむ(巻十2039)

○逢はなくは日長きものを天の河隔ててまたやわが恋ひ居らむ(巻十2038)

という歌があり、これらの「恋しけく」や「逢はなくは」が、いずれも
過去の助動詞を含まない表現であることを考えあわせると、2017の「恋し
くは」を「恋しきは」と訓んだ方が、時に対する観念からも適当である
と思われる。

後者の「き」の意味の問題は別稿に譲るが、「き」は明瞭に過去判断
の助動詞と考えてよいものと思われる。

(甲) 「こひこ」と「こほこ」

ここで「恋」の字の訓の「こひし」と「こほし」について触れておか
ねばならない。「万葉集総索引」によれば、『こひし』および、『こふ』
の連用形十助動詞『き』十準体助動詞「の形の連語で仮名書きの用例は、

(○内、巻数)

こひしくはけながきものを

古非之可利

20

孤悲思吉

17

古非之吉

18

古比之久

20

古非思吉

15

古非之久

17

故非之伎

20

孤悲之家久

17

故非之久

20

古非之家礼

18

古非思家

14

故非之美

15

孤非思家

17

(宇良)胡非之美

17

孤悲之家口

17

(宇良)故非之

17

故悲之伎

15

故保斯苦

17

右の二十一例である。それに反して「こほし」系の仮名書きの語は

古保志枳

5

故保斯苦

4

の二例のみである。「こほし」の形の確例を万葉集以外に求めれば、記

紀の歌謡に

○大魚よし鮪つく海人よ。

しが荒れば うらごほしけむ (宇良胡本斯耶牟)

鮪つく志毗 (古事記・下 111 顕宗天皇御製)

○君が目の恋しきからに (姑衰之枳舸羅爾)

泊てて居て かくや恋ひむも

君が目を欲り (齊明紀 123 天智天皇御製)

の用例を見出すことができる。万葉集の用例は、つぎの二例である。

○梅の花今盛りなり百鳥の恋こほししき春はる来たるらし(巻五 834)

小令史田氏肥人

○行く船を振り留みかね如何ばかり恋こほししくありけむ(巻五 875)

大伴旅人? 山上憶良?

これらが古事記の歌謡と仮名の用法において類似する傾向があるといわれる万葉集巻五に属するということは、「こほし」よりも「こひし」が新しい形であることを思わせられるが、このことは、有坂秀世博士の「母音交替の法則」に照らしてみても納得できることである。すなわち、上代における上二段活用動詞の連用形「こひ」という露出形(「ひ」は乙類)と被覆形「こほし」との交替は、正にその第四則に該当するものであり、その場合、母音調和という点からみて、被覆形が原形で、露出形よりも更に古い時代の面影を残しているものと見られるという推定に合致するものである。有坂秀世博士は、「国語音韻史の研究」の中の「国語にあらはれる一種の母音交替について」で、更に、

コホシがコヒシに変じたのは、名詞コヒ(恋)が頻繁に用いられるため、それから直接派生した語のように感じられるに至ったからではないかと思われる。

と述べておられる。

それではいつごろ「こほし」から「こひし」への変化があらわれ、一般化したものであろうか。仮名で「こひし」と記してある確例は、巻十四以下の巻にしか見えず、更に歌経標式に一例「穴粉火四」という用例

があつて、平安時代に接続する。巻十四、巻二十が、東歌や防人歌の巻であることを考慮すると当時の中央語における「こひし」の確例は更に少なくなる。「こほし」の確例としたものうち、古事記歌謡の顕宗天皇御製の「宇良胡本斯祢牟」の「本」の仮名は、馬淵和夫博士の説に従えば、誤用であるとされるのであるが、「古事記」のシ・オ・ホの「な」(国語字)第31輯(奈良時代の音韻)の「解釈と鑑賞」第31巻第12号)、これは福田良輔博士の誤用を否定する説(奈良時代東国方言の研究)第二章第五節「古事記のホ音について」をまつまでもなく、「ホ」の甲乙二類相当仮名の区別に関する問題であつて、後世の誤記や誤写でないとするれば、「こほし」の不適格例とはならないであろう。

万葉仮名で「こひし」「こほし」を記してある箇所については右記のごとくであるが、集中には漢字で「恋」と記しているところが形容詞関係に限っても二十数ヶ所にのぼり、仮名書きの例を上まわっている。類似的形態をとる、「動詞『恋ふ』の連用形+助動詞『き』の連体形+準体助詞『く』』という形のもは当然「こひしく」であろうが、形容詞の連用形その他の活用形の漢字の用法を「こひし」「こほし」のいずれに訓むべきか、問題のあるところである。これらの訓で読まねばならぬ「恋し」が、古写本でどのように訓まれているかを調べてみると、諸本いずれも「こひし」または「こいし」であつて、「こほし」と訓まれている場合は全くない。これは考えようによってはその訓の付されている時代の国語の語形を反映したのもとも言えるかも知れないが、「こほし」の形の存在しないことは確かであつて、このことは古事記における「恋」

(一例のみ)においても同様である。江戸期の注釈書では「万葉集古義」に、

○稲日野も行き過ぎかてに思へれば心恋しき可古の鳥見ゆ(巻三 253)

〔心恋敷〕柿本人麿

○旅にして物恋しきに山下の赤のそほ船沖へ漕ぐ見ゆ(巻三 270)

〔物恋敷〕高市黒人

○島伝ひ敏馬の埼を漕ぎ廻れば大和恋しく鶴さはに鳴く(巻三 389)

〔日本恋久〕

の三例を「こほし」と訓じているほか、

○吉野川川波高み滝の浦を見ずかなりなむ恋しけまくに(巻九 1722)

〔恋布真国〕僧元仁

○……恋ひしくに痛きわが身そ……(巻十六 3811)

〔恋之久爾〕

の二首も「こほし」と訓んでいる。(本稿では「日本古典文学大系本」

によったので、3811の歌は「恋ひしく」とせざるを得ないが、「古義」では「こほしく」である)

これらの歌の訓を「こほしく」にした理由は、巻三 253の歌の注に記

すところによれば、仮名書きの巻五の 834・875 および、記紀の二首の

用語が「こほし」となっていることによるものであるらしい。従って、

巻五の憶良や旅人と同時代の第二期の歌人、人麿や黒人は当然「こほし」と

訓んだであろう。389の歌も、作者不詳ではあるが、「若宮魚麿誦ふ」と

あるところからみてほぼ同時代であろう。巻九 1722 は、作者の僧元

仁については明らかでないが、人麿歌集所収の歌であって、これも人麿

こほしくはけながきものを

より新らしい時代の歌ではあるまい。また、巻十六 3811の長歌の一節は、「夫の君に恋ふる歌一首」と題する伝説に基づいた長歌の一節であるから、古代の表現として「こほし」と訓むのが適当である。憶測する

ところ、以上のような理由によって上記の五首を「こほし」と訓ませたのであろうか。

「日本古典文学大系」では、ほぼ「古義」の行き方を踏襲している。巻

十六 3811 だけは「恋ひ十しく」と判断したために異なっているが、

そして他はルビを付さずに読者の判断に任せただけ形になっている。

「新訓万葉集」「万葉集注釈」「万葉集全注釈」では、「こひし」と明瞭

に仮名書きした場合のほかは、「こほし」と読むことを原則としているように見える。ここでは形容詞の場合は「こほし」で、動詞の連用形

「こひ」に助動詞「き」の連体形「し」が付いた場合と明瞭に語形上の

相違があると判断しているようである。そのことは、本稿(註)で引用した

「万葉集全注釈」の見解などによっても明らかである。近刊の沢瀉久孝

博士を編集主任とする「時代別国語大辞典上代編」では「こひし」を見

出しとし、「こほし」とも」と記してあるが、「万葉集注釈」の立場と

はいささか異なるように感じられる。

本稿において、巻十 2017の「恋しくは」を「恋しきは」と改訓するの

が妥当ではないかと述べた。その場合、2017の歌が柿本人麿の歌と考えら

れるとすれば、「新訓」「注釈」「全注釈」の立場においてばかりでなく、

「日本古典文学大系」のような立場においてさえ「こほしき」と訓むこ

とになるであろう。

けれどもまた、別の立場にたてば、「恋ほし」と仮名で明記されてある用例は、巻五の二首ばかりである。巻五の筆録者には諸説あって、憶良・旅人、またはその周辺の者などと異論はたえないが、かりに筆者もまた、もっとも穩健・妥当であると考えられる橋本達雄氏の見解のごとく、ほぼ憶良と断定して差支えないものであり（『万葉集巻五の筆録者について』〈国文学研究〉第26輯）、また用字の面ばかりでなく、用語の面においても、古事記の歌謡に見られるごとき、古代の用語を用いたものであるとすれば、憶良の個人的な趣向である古語癖が「恋ほし」の形をとらせたものであって、当時の一般的な形態とは異なる用語であったと見ることも出来よう。

馬淵和夫博士は「奈良時代の音韻」〔解釈と鑑賞〕第31巻第12号〕の中で、

また山上憶良の歌は、「万葉集」巻五に集中し、しかもかな書きが多いというわけで、音韻研究の上からは非常に価値があるとされるが、しかしかれは斉明六年（六六〇）に生れたと推定されており、かの壬申の乱（六七二）には十三歳であった。とすると、かれの言語形成期はすでに天智天皇の時代で終わっているのである。「古事記」を稗田阿礼が誦習したのは天武朝であるから、「古事記」に表われている音韻と、山上憶良の音韻と共通したものがあるといっても当然である。しかもこの二人とも奈良時代には生きていた。

と音韻の面から、奈良時代と藤原宮時代、飛鳥時代とを確然とわかちがたいことを述べられた。山上憶良と稗田阿礼とは同時代に生き、言語

面におけるある交流が行なわれる可能性があるとは言っても、稗田阿礼の口誦するものは、万葉集第二期の歌人達が生きた時代のなまの言語ではあるまい。古事記の歌謡は、作者不明の、またより古代の雰囲気を伝える民謡風のものであって、当然の口語表現との間にかんりの懸隔があったことは確実であろう。大野晋博士は「日本古典文学大系萬葉集二」の補注で、つぎのように述べておられる。

万葉集巻五の万葉仮名は、他の巻のそれと相違し、古事記のそれに近い文字を多く使用している。これは巻五の筆録者が時代的に古い教養をつんでいた結果であろうと思われる。特に古事記にだけ明瞭に書きわけてあるその甲類乙類が、巻五においては多少の誤用がありながらも、大体において書き分けられていることは、万葉集巻五の筆録者が当時において、おそらく老人であり、その老人が古い発音の区別を表記の上で示したものであろう。

右のような事実は、また表記の面ばかりでなく、用語の面における古形の使用をも暗示する。巻五の筆録者が憶良であるとすれば、憶良は巻五の筆録にあたって、あるいは原作者の使用文字を変えてまで、古形の表現に努力した可能性もある。何故なら「こほし」と仮名で記されている巻五の二首は、作者が異なり、834は小令史田氏肥人、875は不詳ではあるが大伴旅人か（山上憶良という説も）といわれる。この別人の作になる二首の歌が、万葉集中他に例をみない「こほし」の形をとっていることは、巻五全体を筆録した者の個人的な嗜好の結果であるとは見られまいか。そのことは憶良筆録者説と密接な関連をもって説明される事柄であ

ろう。

「こほし」が日常卑近の言語でなかったことは、古事記歌謡の「宇良胡本斯祁牟」の「本」の甲類・乙類誤用説とも関係がありそうに思われる。すなわち「本」の誤用は、「こほし」が日常の言語としての生命を十分に保たぬことばであったからこそその誤用ではなかったであろうか。その責は稗田阿礼にあるにしても、太安仞侶にあるにしても。

このように考えると、巻五の二例の他は、「こひし」と訓むのが妥当でありそうに思われる。そうして本稿の主眼である「こひしくはけなきものを……」の歌は「こひしくはけなきものを……」と改訓すべきであろうという結論に達する。

△註▽

橋本進吉の「古代国語の音韻について」で述べている上代特殊仮名遣の甲乙の別を有する仮名は、エキケ以下十三乃至十四であるが、その後「ホ」にも二類の別の存在した可能性を、母音交替の法則から推定している。(昭和七年講義「国語音声史」) それでは、

「こひし」「こほし」(この「ひ」は乙類、同じく「ひる」「ほす」
「に」「荷」「の」「いき」「おき」△息長たらし姫▽、両類の区別のあるものの例によると、乙類の伊段の音と入れ替る字段又は於段の音は乙類である(木が㊦となる例を考へ合すべし)。故に㊦にも二類の区別があるとすればこの㊦は乙類なり。かかる点からみるも古くは奈良朝より余計の音節に二類の別があったのではないかと思ふ。

と述べている。このことについては、永田吉太郎氏、馬淵和夫氏、大野

こひしくはけなきものを

透氏、福田良輔氏らも研究され、その結果、古事記の用字では、「ホ」の仮名としては、富本番菩薩蕃品の六種が用いられており、語としては若干混同をきたしたものがあつるにせよ、多数を占める「本」は甲類、「富」は乙類として書き分けてあり、音韻としても別のものとして意識されていたであろうということを、漢字音の方面からも“Gramata CERICA”や「上古音韻表稿」などを利用して推定された。この論文の中で示した「ホ」の表で「こほし」を誤用としたのは、「奈良時代の音韻」(解釈と鑑賞)第三十一巻、第十二号)によれば、

「コホシ」は「コヒ(乙)シ」と交替し、イ列乙類と交替するのはオ列甲類であるという有坂博士の説に従って「コホ(乙)シ」であるべきと考へ、「胡本斯」は甲類相当の「本」が用いられているからと述べておられるが、これは「国語音声史」における橋本進吉の考へと同様である。

これに対し、福田良輔博士は、「奈良時代東国方言の研究」第二章第二節「古事記のホ音について」の中で、馬淵和夫博士の「本」誤用説について、「サブシ」「シルシ」「フルシ」などの対比からすると、「コフシ」という形が考えられ、「フ」と「ホ」と交替している。ひと交替するのは甲類オ列音だから、「コホシ」の「ホ」は甲類であり、したがって「胡本斯」の「本」のかなは誤りではない。

としておられる。

しかし、福田良輔博士の挙げられた「コフシ」は、「故布思可流」「古布志氣」の二例で

こひしくはけながきものを

○諾児うへてなは吾わがに恋こひふなも立たと月の流ながなへ行いけば恋こひしかるなも（巻十四 3476）

○家いろには葦あし火ひ焚くけども住よみ好よけを筑つく紫しに到いたりて恋こひしけもはも

（巻二十 4419）

のごとく、巻十四の東歌と巻二十の防人歌に存しており、「コフシ」のような東国方言のみ存する方音が、中央語における古形の反映であるかどうか、疑えば疑えるのであって、このことは福田良輔博士も言及しておられるところである。そればかりでなく、巻十四には特に「変字法」や「かけ文字（意義連想の音仮名）」などの、文字の選択にきわめて意識的な技巧がこらされており、その意味では他巻に劣らず、純然たる貴族文学の遺産であるとする「日本語の歴史」第四巻「移りゆく古代語」第一章や「奈良時代東国方言の研究」第三章第一節のごとき見解にしたがえば、巻十四は巻二十ほど東国地方の方言や方音の、なまのままの反映であるかどうかは疑わしいのであって、東国地方にだけ見える「コフシ」の形を、中央語にも存在した「サブシ」「シルシ」と同様に考え、「本」を正しいとする福田良輔博士の見解には考慮の余地があるようにも思われる。

追記 本稿は昭和四十二年七月一日、国学院大学国語研究室会において発表したものに加筆したものであって、「国語研究 第25輯」に掲載予定の「万葉集における『恋ひしく』の文法的解釈について」へ助動詞「き」の意味との関聯から√の一部をなすものである。本稿で「別稿に譲る」と記したのは、この論文である。